

●3年生「地理B」の授業で、単元は「オセアニアの地誌」。地誌全体のまとめの授業として、ペアやグループでのワークを通し、各地域の輸出品から背景にある共通点や相違点を考察した。(P.27に授業デザインを掲載)

前時までのオセアニア地誌を振り返る。先生は「新期造山帯はどこ?」「プランテーションが行われている地域は?」「年降水量500ミリ以上の地域ではどの家畜を多く飼育している?」といった、地形や気候、産業などに関して質問。生徒は、机上の白地図の該当する箇所を指差して、各自で確認しながら、既習の知識を振り返った。

# 「なぜ?」「どうして?」「と問い続け 因果関係を考えさせることで、 「地理」の本質に迫らせる

## 箴島先生のアクティブ・ラーニング

### 因果関係を捉えさせて 地理の面白さに気づかせる

箴島<sup>おさじま</sup>朋子先生の指導の原点には、自身が高校時代に受けた地理の授業がある。

「初めは、暗記重視の授業だったこともあり、あまり面白さを感じていませんでした。しかし、ある先生が、一つひとつの事項について『なぜそうなるのか』という因果関係を丁寧に説明し



大分県立日田高校  
箴島<sup>ひた</sup>朋子 <sup>おさじま・ともこ</sup>

教職歴10年。  
同校に赴任して4年目。  
2学年担任、地理歴史・公民科主任。  
アクティブ・ラーニングの実践は4年目になる。

## 大分県立日田高校

◎校訓は「剛健、積極、明朗」。文武両道を旨とし、学力だけでなく、社会で活躍できる力の育成に力を注ぐ。2016年度に文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」の2期目の指定を受け、1・2年生全員と3年生SSクラスが課題探究に取り組む。

◎設立 1920(大正9)年

◎形態 全日制/普通科/共学

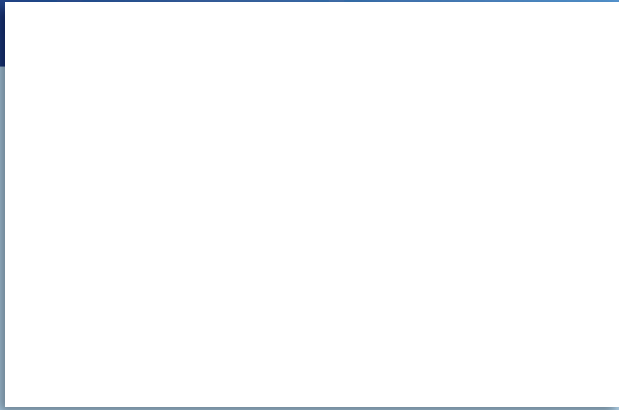
◎生徒数 1学年約200人

◎2017年度入試合格実績(現浪計)

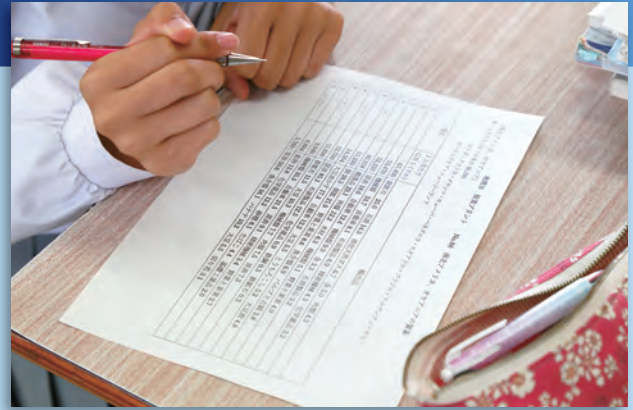
国公立大は、筑波大、東京工業大、神戸大、広島大、熊本大、大分大などに132人が合格。私立大は、青山学院大、早稲田大、同志社大、関西大、関西学院大などに延べ188人が合格。

◎URL

<http://kou.oita-ed.jp/hita/>



隣席の生徒とペアで、ワークを続ける。個人の段階では空欄が目立ったが、「この国は大豆の輸出が多いね」「ということは、家畜がいるのかな」などと考えを出し合い、完成に近づけていった。終了後は各ペアが順に答えを発表。箄島先生は「なぜそう思った?」と根拠を説明させたり、「関連してこの知識も押さえよう」と知識を広げたりする指導をした。



オセアニアと南北アメリカの11か国について、主要輸出品と1人あたりのGNI(国民総所得)から、国名を類推する個人ワークを行った。箄島先生は、「根拠になると思った輸出品目に丸をつけて」と、根拠を基に考えるように促した。また、机間巡視で進み具合を確認し、悩んでいる生徒には「鉄鉱石はどのような地域で多く採れるかな?」など、ヒントを提示した。

てくれて、それまで別個に暗記していた知識が  
つながり、地理の面白さを感じました」

そうした体験もあり、箄島先生は、授業で  
生徒に因果関係を考えさせることを重視してい  
る。ただ、1人で考えるよりも、ほかの生徒と  
意見を出し合った方が考えが深まりやすい。そ  
こに、アクティブ・ラーニング(以下、AL)  
を取り入れた大きな理由がある。

また、抱いていた課題意識として、生徒は家  
庭学習では他教科を優先し、地理の学習が手薄  
になりがちながあつた。いかに授業を中心  
に学びを深めるようにするかを考えたところ、  
最終的にALに行き着いたという。

「生徒は主体的になると、教科の面白さに気  
づき、思考がどんどん深まり、学んだ内容の定  
着も進みます。教師が一方的に教えるのではな  
く、生徒が積極的に参加して思考する授業が重  
要だと考えました」

こうして箄島先生は、4年前にALの実践を  
スタート。校内でALを実践する他教科の授業  
を参観するだけでなく、校外の研修に参加した  
り、他校の授業を見学したりして、自身の授業  
に取り入れていった。

「最初はペアの話し合いを取り入れることから  
始めました。ALの『手法』に走り過ぎず、必  
要な場面では講義形式の指導も行い、生徒自身  
が『知識が定着した』『思考できた』『新しい考  
えを学べた』と感じながら学力を高めていける  
授業を目指しています」

#### 思考の活性化・深化への配慮

### 「なぜ?」と考え続けると 知識がつながっていく

箄島先生は、「なぜ?」「どうして?」など、  
根拠や理由の説明を求める発問を意識して行っ  
ている。

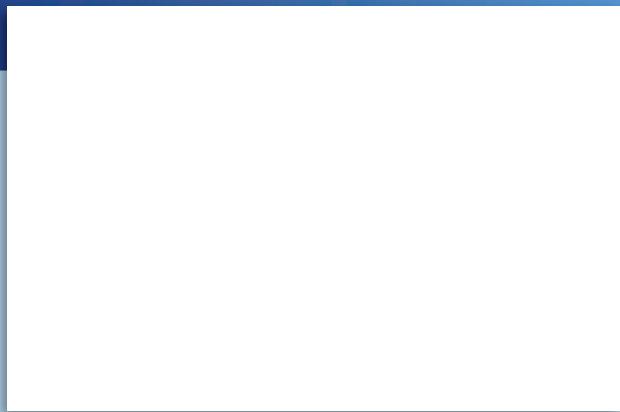
「根拠や理由を深く考える中で、『こんな地形  
や気候だから、この資源が存在し、この産業が  
発展した』といった因果関係が見えてきます。  
元々、地理は、『なぜ?』なるのか』『ほかの地  
域と比べてどうか』『ほかの知識とどう結びつく  
か』など、思考を深める発問を作りやすい教科  
だと思っています。その地域の特徴の因果関係をつ  
かんで理解することこそ、地理を学ぶ本質だと  
捉えています」

この日の授業でも、主要輸出品から国名を類  
推する課題で、ある生徒が「砂糖」に着目した。  
箄島先生が「砂糖は何からできる?」と質問す  
ると、生徒は「サトウキビ」と答えた。さらに「そ  
れはどんな気候で育つ?」と問うと、「温かい地  
域。ということ、キューバかな」と思考を深  
めていった。

ペアやグループワークでは、生徒同士が話し  
合って思考を深めていく。世界の各地域の輸出  
品の特徴をまとめる場面では、「ヨーロッパの  
国々は機械類の輸出が多い」「石油などの資源が  
採れる国や地域もあるね」というように、様々  
な視点から意見が出された。



各グループの発表後、箄島先生は「輸出品からどんなことが分かる?」と質問。「機械類は先進国が多いなど発展の状況が分かる」「農作物や資源から気候や地形が分かる」「プランテーションを行う国は植民地支配の歴史がある」といった生徒の発言を受け、先生は「輸出品にはその国の地形や気候、歴史的背景が表れていることが分かるね」と授業を締めくくった。



地誌の単元のまとめとして、アジアや南北アメリカ、オセアニアなど各地域の輸出品の背景には、それぞれどのような共通点と相違点があるかを3人グループで話し合った。



ほかの人の意見を聞くと、新しい視点を持ったり、忘れていたことを思い出したりして、自分1人で考えることの限界を痛感します。

場づくりへの配慮

ペアやグループの学習は  
時間と生徒の管理を徹底

「初めに教科書を基に知識を教えるから、『これはどうしてだと思っ?』などと全体に問いを投げかけ、生徒の発言をつないでいきます。また、生徒の思考が活性化するように、頻繁にペアワークを取り入れています」

学習内容によっては、講義形式が主体の授業もある。その場合にも、できるだけ生徒に考えさせることに努める。

「この日の授業では、輸出品を通して、地形や気候、資源、歴史的背景などが見えてくること、つまり、これまでに学んできたことは相互に関連していることに気づかせるのが、最大のねらいでした。授業の最後には、多くの生徒が理解した様子でした」

そうした学びを繰り返すうちに、生徒は自分が理解するだけでなく、根拠や理由とともに説明する重要性にも気づく。その段階に達すると、ペアやグループでの話し合いはますます活性化し、「今の説明は分かりやすかった?」などと尋ねる姿も見られるようになるという。

箄島先生がAIを始めた当初は、生徒が要点を押さえて話し合えなかったり、学力が高い生徒が一方的に教えたりといった姿が見られた。「そうした話し合いでは、生徒は学習の効果

を感じられず、ペアやグループの活動が嫌になっってしまう。そこで、時間と生徒の管理の徹底を心がけています」

時間の管理としては、「5分間で話し合っ」などと明確に示し、要点をつかんで、効率的に話し合う意識を持たせる。生徒の管理では、最初に個人ワークを行って、自分の考えを持たせたり、ペアワークの際、「まず右側の生徒から説明して」と指定したりしている。

また、雰囲気づくりの一環として、押さえてほしい事項の語呂合わせを考案し、授業の随所で生徒と一緒にリズムに合わせて発声している。

「考える場面が続いて飽きている様子が見られた時などに、息抜きを兼ねて声を出させています。気持ちが前向きになり、発言しやすいム



白地図を多用することも箄島先生の指導の特徴だ。書き込ませるときれいにまとめることが目的となる生徒がいるため、毎授業の振り返りは指差しをしている。生徒が自分の理解度を把握し、自ら学び直すきっかけとなる。

## 授業デザインシート

【教科・科目】地理B

【分野・単元】オセアニアの地誌

【テーマ・作品】オーストラリアの貿易、世界の貿易

【設定時数】3時間中の2時間目

【本時全体の目標】新大陸の輸出品目から各国の特徴を理解し、地誌の分野のまとめとして、各地域の輸出品から共通点、相違点を考察する。

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標 (身につけさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働きかけの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
前時までの振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>オーストラリアの自然環境や産業の知識を正確にアウトプットする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識</li> <li>思考力</li> </ul>	<p>【静の活動】</p> <p>現在の知識を白地図に引き出し、生徒自身の理解度を把握する。一問一答形式の質問を投げかけ、既習の知識を確認する。</p>	<p>「オーストラリアの地帯構造は？」</p> <p>「オーストラリアの各気候区の種類は？」</p> <p>「○○(資源)が採れる場所は？」</p> <p>「マリー川はどこを通っている？」</p> <p>「プランテーションが行われている地域は？」</p> <p>「年降水量○○以上の地域ではどの家畜を多く飼育している？」</p> <p>「酪農するための条件は？」</p>	個人で白地図を指せているか。
地誌全体の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> <li>南北アメリカ、オセアニアの輸出品から国を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識</li> <li>技能</li> <li>思考力</li> <li>判断力</li> <li>表現力</li> </ul>	<p>【静→動の活動】1人あたりのGNI、輸出品から国名をあてはめる個人ワークをした後、そう考えた理由までをペアで議論する。その後、各ペアが順に発表して答え合わせをして、全体で共有する。</p>	<p>「1人あたりのGNI、輸出品から国名をあてはめてみよう」</p> <p>「根拠になると思ったところに丸をつけて考えよう」</p> <p>「(生徒の答えに対して)なぜ、そう考えた？」</p>	「なぜその答えを選んだのか」を議論できているか。
地誌全体のまとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>今まで学習した各地域の輸出品を振り返り、各地域の共通点・相違点を考察する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識</li> <li>思考力</li> <li>協働性</li> <li>表現力</li> </ul>	<p>【動の活動】3人1グループで、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、南北アメリカ、オセアニアの輸出品の共通点、相違点を考える。その後、各グループが発表して共有し、地誌全体のまとめにつなげる。</p>	<p>「各地域の輸出品でどんな共通点があった？」</p> <p>「例外は？」</p> <p>「輸出品からどんなことが分かる？」</p> <p>「輸出品を見ると、今まで勉強したことが全部隠れているね」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>輸出品を見ることで、地域的な規則性や傾向性、その国の自然環境、経済状態が分かることに気づかせる。</li> <li>「アジアはひとつくりできない」ことに気づかせる。</li> </ul>

\*葦島先生作成の授業デザインシートを基に編集部で作成

ドになることも大きな利点です」

成果と課題

### 「覚える教科」から「考える教科」に意識が変化

2年生の最初は、地理は「覚える教科」と考えている生徒が大半というが、前述のような授業を繰り返して経験すると、「考える教科」という意識が変わっていくという。

「生徒は自分で考えるようになり、次第に私も想定していなかった深い考えが示されることが増えていきます。ある生徒は、地理の授業で学んだ『なぜそうなるのか』という思考が、他教科にも生きたと話してくれました」

また、「歴史より楽しそうだ」といった消極的な理由で地理を選択した生徒が、授業を重ねるうちに「地理の面白さが分かった」「大学で地理を専攻したい」と言うようになるほど、学習の姿勢が変わっていった。

今後は、さらに思考力を高めていくために、多様性や新しい価値観を身につけることを意識した学びを取り入れたいと考えている。

「答えのないテーマについてディスカッションする学習などを検討しています。そうした学びを通し、地理の面白さを実感するとともに、大学入試の結果にも結びつき、3年生の最後に『地理を学んでよかった』と思ってもらえる授業を実現したいと考えています」